

平成16年10月12日(火)  
経済産業省別館 944号会議室

## 第2回家畜改良増殖目標についての研究会(豚)議事録

高橋班長 それでは、定刻になりましたので、ただいまから、家畜改良増殖目標に係る第2回目の豚研究会を開催したいと思います。

まず、本日の委員の皆様の出席状況をご報告いたします。

岡島委員と吉田委員におかれましては、所用のため、ご欠席されることとさせていただきます。

また、1回目ご欠席の新村委員が本日ご出席でございますので、ご紹介いたします。

新村委員 日本食肉加工協会の新村です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

高橋班長 本日も、家畜改良増殖小委員会の金井小委員長に、傍聴ということでご出席いただく予定ですが、少し遅れております。後ほどおみえになると思います。

また、事務局側ですが、大変失礼ではございますが、塩田畜産振興課長も、所用のため、欠席させていただきます。よろしくお願い申し上げます。

本日の研究会につきましては、第1回研究会におきましてご検討いただきました改良増殖目標(案)につきまして、委員の皆様のご意見を踏まえたものをお手元に配付してございます。

本日の研究会では、頭数以外の目標案につきまして、できる限り成案に近いものを得たいと考えてございます。

また、これまでの研究会での検討内容は、11月4日に予定しております家畜改良増殖小委員会に、座長からその検討状況をご報告いただく予定でございますので、よろしくお願い申し上げます。

それでは、早速ですが、第1回研究会に引き続きまして、阿部座長に議事進行をお願いいたします。

阿部座長 日本大学の阿部でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

今、事務局からお話がありましたように、前回は真摯な議論をいただきました。本日の研究会でも同様に、専門的な立場から忌憚のない意見をいただいて、活発な研究会にできればと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

今日の時間の目安ですけれども、3時半までには終了したいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

では、議事が始まるのに先立ちまして、資料の確認・紹介をお願いいたします。

高橋班長 それでは、本日配付しております資料の確認をさせていただきます。

右肩に番号を付してございますが、資料1が「次第」でございます。資料2が「委員名簿」、資料3が「豚の改良増殖目標」、

現行目標の抜粋でございます。資料4 - 1が「豚の改良増殖目標の検討（案）」、これが本日のメインの資料でございます。資料4 - 2が「新目標のイメージ」、資料5が「27年度目標の検討値（案）」、資料6が「検討値の算出根拠」、資料7が「第1回家畜改良増殖目標についての研究会（豚）議事録」でございます。

阿部座長　おそろいでしょうか。

それでは、これから議事に入りたいと思いますけれども、最初に高橋班長から話がありましたように、11月4日に家畜改良増殖小委員会が予定されており、研究会の検討状況を紹介するというところでありますので、今日の議論で、成案に近いものにするということで進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、最初に、事務局から資料のご説明をお願いいたします。

山本班長　私、中小家畜班を担当しております山本でございます。

それでは、早速、資料の説明をさせていただきたいと思っております。お手元の資料でございますけれども、具体的に申しますと、資料3から資料7までありますが、特に資料4 - 1の「豚の改良増殖目標の検討（案）」、資料5の「豚の能力の推移及び平成27年度目標の検討値（案）」、資料6の「検討値の算出根拠」、この3つの資料につきまして、ただいまから説明させていただきます。

まず、資料4 - 1でございます。前回の研究会で委員の皆様方からご指摘いただきました。その後、文書等でもご意見をいただきました。また、全体的に内容をよりシンプルにわかりやすくということで、前回の資料に訂正を加えてございます。

1ページをお開きいただきたいと思います。資料の構成といたしましては、左側が「現行目標」、真ん中が前回提示しました「検討の方向」、右端が「今回提示案」、修正案ということでございます。

まず、1ページ、「豚をめぐる情勢」の修正点といたしましては、先ほども申しましたが、内容をシンプルに分かりやすく、ということで、最初の養豚の位置づけの部分は、「てにをは」は多少変わっておりますが、ほとんど変わってございません。

その下は、発展過程といいますが、生産の発展の状況ということでございまして、そこに下線を引いておりますが、飼養管理技術の状況やその変遷、改良の変遷といったものもこの中にドッキングして文章をつくっております。その改良の推進、配合飼料、豚用ワクチン、自動給餌機といったことで生産性が向上した、規模拡大が進展してきた。また、それに関連する技術として、人工授精、SPF、食品残渣を利用するリキッドフィーディングなどに取り組みられてきた、という流れになっております。

一番下の部分には、品種の生産・利用といったことを書いてございます。

2ページでございますが、それに続きまして、経営形態、一貫経営が多数を占めること、需給面の話、ふん尿処理や衛生対策を

記述してございます。

中段でございますが、「めぐる情勢」の最後の方は、消費者ニーズへの対応といったことで、多少ボリュームアップしております。「消費者の多様なニーズに対応した高品質化等への取り組みが求められており」ということで、前回に比べて、パークシャー種や純粋種の利用の増加といったことも書き加えております。

その下でございますが、前回の「飼養管理技術等の変遷」という部分は省略してございます。

3ページでございますが、下の方に「これまでの改良の取組と成果等」ということで書いてございます。

次の4ページに移りますが、変えたのは、産肉能力の部分で、「改良手法が確立された」という表現でございましたが、それを、検定するに当たって、統一的な基準が定められたといった表現にしております。

その下の方で、アンダーラインを引いておりませんが、「平成16年現在までに全国で73系統を造成」したということで、新しい数字に変えております。

その下の方で、前回、民間で行われていた育種につきまして、「開放型育種」という言い方をしておったのですが、これは適切ではないのではないかとというご意見がございまして、「優良な種豚群の造成」という表現にしております。

その下に、「外国で改良されたF1母豚及び種豚の導入も増加した」という部分を書き加えております。

注意書きといたしまして、系統造成のことを注1)で加えております。

その下の「なお」以下の産肉能力の検定手法の表記の部分でございますが、前回は、「検定技術の進歩」ということで、「直接検定への移行が進んでいった」という書き方にしておったのですが、不適切ではないか、ということがございまして、「検定期間の短縮化が求められたこと」とか、スキャニングスコープなど、「検定機器の開発等により」という表現にしております。

続きまして、5ページでございます。(2)の「成果」の部分でございますが、ここは項立てを見やすくしております。1.で「純粋種豚」、2.で「肥育もと豚生産用母豚」、3.で「肥育豚」ということで、項立てを明確にしております。

また、表現をかなりシンプルにしております。特に1.のイの「産肉能力」の部分につきましては、飼料要求率やロースの太さなどにも触れておったのですが、説明が錯綜いたしますので、そういった部分はカットしております。「肥育もと豚生産用母豚」や「肥育豚」の方も、焦点を絞って簡略化しておるということです。

一番下の方の出荷体重のところの記述でございますが、出荷日齢と出荷体重の関係を記述しておいた方がいいのではないかとということがございまして、「出荷日例の短縮にもかかわらず産肉能力の向上を反映して」、出荷体重は「増加基調で推移しており」という表現にしております。

続きまして、6ページでございます。前回は、経営改善の効果も記述しておりましたが、経営改善の効果は、改良だけではな

く、例えば生産資材の要因等ございまして、数字的に記述するのは難しいのではないかと、ということで、ここの部分は削除しております。

「また」以下のところでございますが、高品質化に関する成果も追加記述しております。

注2)といたしまして、飼料要求率の用語の解説を追加しました。

(3)といたしまして、「改良増殖をめぐる課題」でございます。こちらも項立てを分かり易くしております。具体的にいいますと、1.は「繁殖性・産肉性等の改良の推進」、2.は「肉質の改良の推進」ということで、前は少し漠然とした言い方になっていましたので、そこを明確化しました。記述につきましても、シンプルに直してございます。

下の方にございますが、改良手法ということで、「ロース芯筋内脂肪含量等を指標とする改良手法の普及」ということを強調して書いております。

続きまして、7ページの3.といたしまして、「純粋種豚の維持・保存の必要性」でございますが、特に特徴のある形質をもった純粋種豚の数が減少しておるということで、「その維持・確保及び育種実施機関への安定供給体制の整備が課題となっている」ということで、少し強調した書き方にしております。

4.の「種豚の耐用年数の向上」でございますが、前回、「種豚の廃用原因の主たる理由の一つとして、肢蹄の不良」ということで、ちょっと短絡的な書き方をしておりましたが、それだけではなく、当然の話でございますが、繁殖障害なども含めて、種豚の廃用の理由になっている、というご指摘をいただきましたので、そういったことも加えた表現にしております。

また、肢蹄の改良のため、改良手法の普及も強調して書いてございます。

その下は「改良増殖目標」ということで、こちらが従来の本体部分になるところでございます。(1)の「基本的考え方」で、前はただだらといいますが、今までの記述と重複したような書き方になっておりましたので、ここの部分は簡略化して書いてございます。

大きな柱としましては、繁殖能力、産肉能力、肉質の向上といったことを改良する。

その下の「また」以下のところで、実効性の高い肉質の改良手法の導入、遺伝的能力評価、繁殖障害、肢蹄の改良、遺伝的多様性等々、改良するに当たっての留意事項を書き加えております。

続きまして、8ページでございます。こちらは「てにをは」だけの修正でございます。

9ページには、前回、ご議論いただきました「能力」の具体的な数値が載っております。

まず、純粋種豚の能力でございますが、前回の指摘といたしまして、大きく分けて3つのお話をいただきました。

まず1つは、増体性、1日平均増体量といった部分について、ランドレース種や大ヨークシャー種といった雌系については、それほど上げる必要はないのではないかと。2つ目は、ロースの太さ

についても、雌系の部分については、それほど上げるような話にはならないのではないかと、ということでございます。

3つ目といたしまして、背脂肪の厚さでございますが、1つは、現状値より無理に下げる必要はないのではないかと、また、最低でも前回の目標水準はある程度維持するような形にすべきではないかと、というご指摘であったと認識しております。

それで、今回の数字を提示するに当たりまして、目標設定の考え方を、前回提示いたしましたときから変えてございます。

1日平均増体量、飼料要求率、ロースの太さ、この3つでございますけれども、前は直接検定のAクラス以上のものということで、上位20～50%程度になるかと思いますが、今回、Bクラス以上ということで、上位40～70%ぐらいのレベルに下げまして、目標数値を算出したということでございます。

例えば1日平均増体量につきまして、前は、ランドレースが910g、大ヨークシャーが920gという数字でございましたが、今回の数字では、ランドレースが900g、大ヨークシャーが910gということで、若干下げた数字になっておるということでございます。

ロースの太さにつきまして、前回は、ランドレースと大ヨークシャーですが、39cm、39cmという数字でございましたが、37cm、38cmということで、現状値と大体同じような数字になったということでございます。

背脂肪の厚さでございますが、これは単純にトレンドということではなくて、考え方といたしましては、パークシャーやデュロックにつきましては、現状の数字をそのまま目標にしたということです。ランドレースと大ヨークシャーは、先ほどのような考え方でいきますと、1.6cmという数字になってしまうのですが、前回の目標は1.7cmということでございましたので、その数字を引き続き目標とするということでございます。今回、そういう考え方で数値を設定しました。

もう一つは、後ほどの肥育豚の数値と関連してくるわけでございますが、肥育豚の数値と比べて、純粋種の能力が少し高いのではないかと、要するに、両者の能力水準に乖離があるのではないかと、というご指摘をいただきました。私どもの認識といたしましては、純粋種は直接検定成績でございますが、ステーションレベルの能力。それに対しまして、次の説明で出てきます肥育豚の能力は家畜生産費調査の数字からとっておりますが、フィールドのデータということで、両者の能力水準に少し乖離があるという認識でいるわけでございまして、従来、そういう考え方のもとに、ずっと数値をはじいてきたわけですが、今回は、直接検定のデータ数がそれなりにございますので、数値をはじいたのですが、今、直接検定のデータ数もだんだん少なくなってきておりますので、次回以降の宿題といたしまして、現場直接検定の数値をどのように織り込んでいくかということも検討していく必要があるかな、という認識でおります。ただ、今回は、先ほどもお話しさせていただきましたように、従来に引き続いて直接検定のデータを使いまして、その数値をはじいたということでございます。

続きまして、10ページでございますが、肥育もと豚生産用母豚

の能力でございます。前回、年間分娩回数につきまして、私からいろいろお聞きしたわけでございますが、委員の皆様から、大体2.3回ぐらいになるのではないかというご意見を伺ったところでございます。

今回の算定の仕方といたしましては、従来、トレンドから推計しておったのですが、今回は中央畜産会の経営診断などのデータを使いまして、経営診断の上位クラスのところの分娩回数を計算し、平均をとりまして、今回の目標値とさせていただきます。前は2.2～2.3回ということでございましたが、今回は2.3回ということで提示させていただいております。

その下の肥育豚の能力でございますが、先ほどの純粋種の議論とも関連いたしまして、出荷日齢はもっと早くなるのではないかと、というご指摘をいただきました。私どもも、こちらの方につきまして、トレンドの推計期間などを変更いたしまして、もう一回トレンドをとり直してみました。それで、前回188日から大体183日ぐらいになるのではないかと、ということで、再度、試算値を出しました。

出荷体重でございますが、113kgで、実態と比べると少し小さいのではないかと、というご指摘をいただいたところでございます。食肉流通統計などの数字を用いまして、出荷体重換算でどのくらいになるかという検証もしたわけでございますけれども、統計上は大体113kgぐらいになっております。ただ、各委員の値ごろ感といったものにつきまして、再度聞かせていただければありがたいなと思っております。

その下の「体型」の部分は変わってございません。

その下の「改良手法」というところでございますけれども、「てにをは」を修正しております。

また、11ページ中段の工の部分に、前回、遺伝的能力評価を加えましたが、さらに、効率的な改良のために、受精卵移植なども活用していくということで、「受精卵移植」を加えてございます。

4.の「その他」のところでございますが、変えたところはアのところでございます。委員からいただきましたご意見の中に、農場の畜舎環境など、能力を発揮できるような配慮も必要ではないかと、ということがございまして、「畜舎環境」という言葉を使っておりませんが、「遺伝的能力を十分発揮できる適切な飼養・衛生管理の徹底により」という表現に変えさせていただきました。

そういうことで、そのような数字に基づきまして、資料5や資料6の数値をいろいろ変えてございます。時間の関係で、そちらの説明は省略させていただきますが、私が説明いたしました事項につきまして、認識のおかしい部分、追加すべき事項、目標数値の妥当性などにつきまして、再度ご議論いただければありがたいと思っております。よろしく願いいたします。

阿部座長　ありがとうございました。

それでは、今ご説明していただいたことについて、これからいろいろご意見を伺うわけですが、2つに分けて進めていきたいと思っております。最初に、1ページの「豚をめぐる情勢」と3ページの

「これまでの改良の取組と成果等」、それが7ページの真ん中で続くのですが、この2つについて、いろいろご意見をいただいて、それで一区切りにして、数値を含んだ「改良増殖目標」については、その次にご意見をいただくということで進めていきたいと思いますが、いかがでしょうか。

まず、1番と2番について、ご意見をいただきたいと思えます。お願いいたします。いかがですか。

新村委員 質問ですけれども、5ページの(2)の「成果」の1.の「純粋種豚」のイの「産肉能力」の中ほどに、「一方、背脂肪の厚さについては、我が国における『おいしさ』に対する消費者ニーズ等もあり、近年減少ないし横ばい傾向で推移している」という記述があるのですが、背脂肪の厚さとおいしさとはどういう関係があるのか。この記述をみますと、背脂肪が薄いのがおいしさにつながっているような印象を受けてしまったのですけれども、いかがなものかと思いました。

山本班長 これは、傾向といたしまして、「近年減少ないし横ばい傾向で推移している」ということでございますが、増体性向上ということで改良を続けていきますと、背脂肪厚は恐らく、どんどん薄くなってくると思うのですが、その部分は、極端に薄くならないような形で推移してきているのではないかと、いうことでございます。日本の場合は、やはりおいしさということがありまして、海外も最近、育種の考え方が少し変わってきているというお話を聞いておりますけれども、極端に薄くなるという話ではなくて、背脂肪の厚さをある程度保ちながら、若干薄くなっていると思えます。そのような形で推移してきているという意味でございます。

阿部座長 よろしゅうございますか。このところは、現状はこういう状況になっているということで、新村委員、前回の議事録をみていただきますと、こちら辺について、皆さんで随分議論されていて、その部分は今日もまた、その数値の中で議論があると思えます。

新村委員 いや、議事録は一応読んできたのですが、どうもいまひとつ分からない感じがあったものですから、改めてお聞きした次第です。

阿部座長 他にいかがですか。

石井委員 今のところに関連した話なのですが、**「着実に改良されてきた」というのは、例えば増体性について、着実に改良されたとかプラスの方向だというのはわかるのですが、背脂肪を改良するというのは、マイナスの方向、減らす方向に改良するのが普通ですよ。「近年減少ないし横ばい傾向」といったとき、育種側から考えると、逆に背脂肪が厚くなってきているととらえるのですが、育種の専門家ではなく、一般の方々は、近年減少傾向にあるということは、逆にマイナスの方向にあるととらえ**

る人が多いのではないかと思うのですね。ですので、これの書き方として、背脂肪の厚さについては、トレンドとして、薄くなる方向に行っているのを改良としているのか、厚くなる方向に行っているのを改良としているのか、きちんと書いた方がいいのではないかと思うのですが、どうでしょうか。

阿部座長　　ここは項目が「成果」ということで書かれていますから、「成果」ということになると。

石井委員　　これまでも減らす方向、薄くなる方向で成果が出ていたわけです。薄くなるのが成果というのは、我々専門家は分かるのですが、これは一般の方々にも分かる資料というか、今度からそのようにするというのですから、それは薄くする方が成果だということを明示しないと分からないのではないかと、思うのです。

尾形委員　　背脂肪につきましては、薄くするだけがこれからのものではない。「適度な脂肪に覆われ」という言葉が常に入るので、この「適度な脂肪」はどれくらいかということ重視しなければいけないと思っています。

石井委員　　そうなのですけれども、今までの改良の成果ということで、今までの改良は、必ず薄くする方に改良していたので、それについては薄くして、それが成果になっているということで、今後、薄くしないなら薄くしないでもいいのですが、厚くするという改良目標は今までなかったはずですから、それについて、薄くするという改良目標で進んできて薄くなったと。それが近年、余り薄くならなくなってきた。逆に、ちょっと厚目になってきたというのであれば意味は通ると思うのですが、我々委員の中では通っても、一般の方には分からないのではないかと、このことがあります。ここは、今後、見直すのはどうこうというのはまた別にして、成果としては薄くなってきたが、近年は余り薄くなっていないと書いた方がいいのではないかと、ということです。

入江委員　　この文章につきましては、新村先生がおっしゃったように、私もちょっとひっかかったのですけれども、前回の案は、よく考えてみれば、つじつまは合っているのですね。今回、石井先生などが指摘されているのは、これは目標とこれからの傾向と結果が入り混じっているのですね。だから、例えば背脂肪の厚さについては、近年、遺伝的に減少させてきたけれど、最近はおいしさということで横ばい傾向になりつつある。将来、あるいは現在、横ばい傾向になりつつあるけれども、今までは、育種的には減少させてきたという書き方にすれば分かり易くなるのではないのでしょうか。

阿部座長　　では、今、入江委員が言われたようなことを書き加えていくというか、分かり易くしていくということによろしくございますか。

尾形委員 前回の目標値は 1.7 c m だったのですね。それが現状値は 1.6 になったということで、目標値を超えてしまったのですね。薄くなり過ぎたのですよ。その辺の表現があってもいいのではないかと。だから、今後、また 1.7 c m に戻すのだというイメージになるといいのではないかなという気がするのですね。

阿部座長 後の書きぶり等、配慮しなければならない。しかし、尾形委員は、大筋としては、入江委員がいわれたようなことを文章の中へ書き込むということでは異論はないと。しかしながら、後の数値のところと合わせることができればということで、文章的な表現について、特に何かありましたら、なければ事務局にお任せするというところでよろしゅうございますか。

尾形委員 はい。

阿部座長 他いかがでしょうか。

坂井委員 1 点、ご訂正といえますか、前回申し上げるべきところだったのですけれども、4 ページの右の方に「昭和40年代には、生産者の」云々とありまして、次のパラグラフで「一方、種豚生産者及び農協等」となっておりまして、この「農協等」は、下の方のつながりでいきますと、「民間による優良な種豚群の造成により」というのにつながってくるのだらうと思うのですが、前回でいうと、開放群育種という分野に位置づけられる。こういう流れになっておりますけれども、農協関係で調べてみましたところ、開放群育種で自ら豚を改良しているところは見当たらなかったものですから、ここで「農協等」というのを削除していただいた方が妥当と思います。ご存じのとおり、全農では昭和50年代から系統造成に取り組んでおりますし、また、各県単位では、県の研究所から系統造成豚を譲り受けまして、増殖しているという実態がございますので、むしろ上に位置づけられるのかなと思いますので、ここはご訂正いただきたいと思います。

阿部座長 事務局どうですか。

山本班長 はい。

阿部座長 では、そういうことで。  
他にいかがでしょうか。

尾形委員 5 ページの下の方の3.の「肥育豚の産肉能力」のところですが、出荷日齢の短縮にもかかわらず、産肉能力の向上によって出荷体重が 4 k g ほど増えた。これは反対で、出荷体重が増えたのに出荷日齢は短縮されているという書き方になるのではないのでしょうか。出荷体重は、改良によって増えたのではなく、市場の要請によって増えているのですよ。それなのに出荷日齢は短くなっているという言い方がスムーズではないかなという気がするのです。

阿部座長 どうですか。

山本班長 具体的な表現といたしましては、出荷体重が大きくなっているにもかかわらず、出荷日齢は短くなっているということですか。

尾形委員 ええ。

山本班長 そうすると、上の表現とダブってくるような話になりますよね。出荷日齢は短縮がみられると書いて、その下もとなると。

尾形委員 これは、全体をひっくるめまして、そういう形にすればいいのではないかなという気がしたのです。

山本班長 基本的には、出荷日齢の部分だけで表記する話ではないか、ということですか。ここでは、出荷日齢がどうだ、出荷体重がどうだという2つの分け方にして書いているのですけれども、基本的には、出荷日齢がどうなったという記述で表現すべきではないか、ということですか。

尾形委員 出荷体重のところには、「出荷日齢の短縮にもかかわらず」とあります。

山本班長 出荷日齢の短縮にもかかわらず、今、出荷体重はどうかと書いているわけです。

尾形委員 はい。だから、むしろ出荷体重の方が先に来るのかなと。

山本班長 出荷体重が増加しているにもかかわらず、出荷日齢は短くなったという話ですか。

尾形委員 そうですね。

山本班長 だから、上の部分とあわせて、そのようにした方がよろしいと。

尾形委員 ちょっと書き直していただければいいと思います。

山本班長 基本的には、出荷日齢だけの記述ということになるのですね。

尾形委員 そうですね。出荷体重が大きくなってきているのは、改良といったものではなく、市場の要請ですよ。

山本班長 ただ、私どもの認識といたしましては、産肉能力の向上は、形としては、出荷日齢の短縮、出荷体重の増加、その

2つに分かれて発現してくると思うのです。そういうことで、要は、両方あわせて増体性の改善かなと認識していたのです。いや、特にこだわるつもりはないのですが、そこは、各委員の皆様にご意見をいただければありがたいのですが。

阿部座長 この点について、いかがですか

鹿又委員 このあたりの修正については、私から意見を出させていただいたのですが、「成果」としての「肥育豚の産肉能力」のところでは、こういった成果が出ています、ということを書き記述したいわけですので、具体的に文章をどうこうとまでは申し上げませんが、そういう視点でまとめていただければいいと思います。

そうしますと、出荷日齢が改良の対象となるわけですので、やはり出荷日齢が主語といいますか、中心となる記述になるのではないかと思います。

廣川室長 少し気になる点なので、尾形委員以外の方に聞きたいのですけれども、この目標の中では、実は出荷体重は伸ばすことになっていて、実際、出荷体重は、市場の要請によって伸びてきているわけです。そうだとすると、ここは市場の要請を目標としなければいけないです。本当にそういう話なのでしょうか。110kgでピン止めして、出荷日齢だけ早くするのはある意味で簡単なのですけれども、今までの議論では、そこは確かに曖昧だったと思うのです。今110kgで、10年後113kgにしてしまっているものかどうかですね。市場の要請で、まさか1kgずつ大きくなっていったりはしないだろうと思いますし、そこはどうなのでしょう。ご意見をいただければ。

阿部座長 いかがでしょうか。

入江委員 出荷体重は、市場の要求で増えていると思います。なぜ出荷体重を増やしているかということ、1つは肉質の向上、1つは1頭当たりの経費節減ということ。それによって115kgぐらいで出している例、あるいは120kg近くで出している例も別に珍しくない状況になっていますので、出荷体重は、やはり市場ニーズを反映して伸びているのだと思います。将来も少しずつ重目になっていくのですかね。現在の傾向として、重目になっているのは事実だと思うのです。

阿部座長 他にいかがですか。

鹿又委員 確認と質問になりますが、今回の提示案は大分すっきりとまとめていただいたかと思います。

説明の際に触れておられましたが、経営改善効果については、改良だけの要因ではないということで今回削除されていますが、他の畜種も同じような扱いとなっているのでしょうか。

あと、全体的な項目立ての横並びですね。私ども、豚の資料しか目にする機会がないものですから、他の畜種はどのような構成

なのか、その辺、ご説明いただくとありがたいと思います。

もう一つ、これは質問になりますが、7ページ、「改良増殖をめぐる課題」の3.としまして、「純粋種豚の維持・保存の必要性」という項目立てがございまして、最後、「安定供給体制の整備が課題となっている」と記述されております。私の所属する家畜改良センターも、この安定供給の一端を担うことになると思っておりますが、その整備の方向としまして、畜産振興課でどのような考え方をされているか教えていただければと思います。

私、牧場に来て、いろいろ見聞きしてみますと、種豚生産者の方々のニーズは多様だというのが実感です。枝肉市場をねらった豚づくりをされている方もおられますし、産直でいこうという方もおられますし、産直でも生協さんを対象とするところ、スーパーさんを対象とするところ等あって、種豚に求めるものが少しずつ違うわけです。そういう意味で品揃えも重要なことだと実感しております。そういうことも考えておりますので、この供給体制の整備について、お考えをお話しいただければと思います。

高橋班長　まず、前段部分について、私から簡単にご説明したいと思います。

今回の提示案は、1回目と比べまして、ボリューム的にも大分少なくしたのですが、読みやすさに重点を置いて書き直しました。1回目を読んでいただいてお分かりだと思うのですが、「課題」と「基本的考え方」にどうしても重複している感じがあったのです。結局、同じことを何回も繰り返し書くようなところがあったので、そこは各畜種で分かり易さを追求しようということで、ボリュームが大きすぎるとよくないということもありますので、そこはそういう視点で直しました。

特に経営の視点といいますか、具体的には、豚だけ経営コストが書いてあったのです。他の畜種はここまで書いていなかったのです。数字の正確性や、豚で書けば、他も書いた方がいいのではないか、という議論があって、そこは純粋に改良の成果ということだけで、数字は、各畜種とも改良の成果のみ記述するようにいたしました。

特に「成果」のところは、各畜種横並びで書くのは、なかなか難しいものですから、今、まだ検討中ですが、基本的には、各畜種ともコストのことは書かないという方向で整理してございます。

山本班長　2つ目の純粋種豚の安定供給体制のお話でございますけれども、この役割を担うところといたしましては、従来から家畜改良センターで、系統豚の造成、純粋種の維持等やっておりますので、そういったところで優良種畜の配布はやっておりますと思いますが、17年度の予算要求の中でも、私どもの事業で、豚の家畜改良の事業があって、それは従来、系統の造成・維持といったものだけを対象にした事業になっておったのですが、予算の対象として、純粋種の優良種豚群の造成・維持といったものも考えていきたい。これは要求中の話ですので、最終的にどうなるか分かりませんが、都道府県などでも、出来ればそのような供給ができるような形にしたいと考えているというこ

とでございます。

鹿又委員 はい。ありがとうございました。

阿部座長 5ページが一番右下の3.の部分の書きぶりですけれども、細かいことは事務局にお任せするとして、「成果」ですから、育種改良の成果が産肉能力の向上につながって、それで出荷日齢が早くなっているのだということを、最初にうたっておいて、それは結局、その後に書いてある飼料要求率にも当然反映していくこととなります。そういった意味でつながってくるのですが、それでは、出荷体重が少しずつ増えてきているということについてはどうなのですか。入江委員がおっしゃった市場の要請が背景にあるということ「成果」の中に書き込んではいけないのでしょうか。その辺、どうですか。そうすると分かり易い。

山本班長 認識としましては、当然、そういった市場の要求に応じて、私どもがつくった体重も、過去のトレンドなどからみると、このようになってくるだろうということで設定しているわけです。それ以上の産肉性の部分については、出荷日齢の短縮という形であらわれてくるのかな、ということでございます。

阿部座長 そうすると、今、私が言った前段の部分でとどめる書き方をするとということによろしゅうございますか。意図するところはもうおわかりだと思いますが。

山本班長 表現の仕方はどういたしましょうか。

阿部座長 表現の仕方はお任せしますけれども、そういう書きぶりにするということで。

石井委員 今回どうこうという話ではないのですけれども、先ほど生産技術室長がおっしゃったことについて、私なりの私見ということで1つ言わせていただきたいと思います。

肥育豚の生産性向上ということに関して、我々育種の側から考えますと、結局、増体量はどのくらいかということだけが重要で、増体量によって出荷日齢と出荷体重は決まってしまうということで、結局、その関数なのです。ですので、7ページ以降に入ってしまうので、今回、私、言いませんでしたが、肥育豚の能力に関する目標数値は、出荷日齢と出荷体重は適切かどうかということが、元々あるのではないかと個人的には考えております。今回はこのままでいいと思うのですが、将来的には、この形は見直した方がいいのではないかと私は思います。牛などであれば、成熟しないと筋肉脂肪は入らないというのがありますので、その日齢を下げるということについて、目標数値を入れるのはメリットがあると考えますが、豚の場合、そこはどうなのかなというのがありますので、今後、検討していただきたいと思います。

阿部座長 よろしゅうございますか。

廣川室長 はい。

阿部座長 どうもありがとうございました。

その他にいかがでしょうか。よろしいですか。

それでは、先へ進みます。7ページの大きな項目の3番目の「改良増殖目標」、7ページから最後のところまでですが、その部分について、いろいろご意見をいただきたいと思います。お願いいたします。

坂井委員 1点、質問です。7ページの「改良増殖目標」の「基本的考え方」の1行目から2行目にかけて、「特長のある豚肉生産を推進するため」ということで、「特長のある豚肉」ということが前面に出た表現になっているのですが、「特長のある豚肉」というのは具体的に何なのか、ご説明いただけますでしょうか。

山本班長 今後、国際化の進展が考えられるわけですので、そういった中で差別化といったことも踏まえて、国産としての特徴を前面に押し出したような豚、具体的には肉質が必要になってくるのでしょうか、産肉性や繁殖性を置き去りにするというわけではないと思います。いずれにしましても、生産性を上げる中で、国産豚肉の特徴をアピールできるような豚肉づくりをやっていくという意味でございます。

坂井委員 我々、一般的に、「特長のある豚肉」といった場合、差別化豚肉をイメージするのです。

豚の改良といった場合、2つの方向性があるのかなと思っています。前回も同様な話が出たかと思うのですが、いわゆる大衆豚として、豚をどう改良していくかということ、先ほど来話があるように、繁殖性や産肉性を重視して改良していく。もちろん、肉質は全く無視するというのではなくて、そこをも視野に置きながら、ということになるのだらうと思うのです。

もう一つは、ちょっと極端な言い方になりますけれども、ニッチな世界といえますか、いわゆる差別化するための豚に改良していく。具体的な例でいいますと、トウキョウXなどはそういう例になると思うのです。

ここでいう「特長のある豚肉」というのは、2つの意味が混在しているような気がするのです。求めるものとしては2つのものがあるのですが、イメージとして、後、どう展開するのか、というのが分かりづらい気がするものですから、そこは整理した方がよろしいのではないかと思います。

阿部座長 これは事務局で整理していただくことにして、前回、家入委員からも今のようなお話があったのですが、今、坂井委員が言われたことは、繁殖能力や産肉能力、また、外国から買っている飼料を減らして、飼料自給率を少しでも高めるという視点でいく部分がまずあって、その次に肉質ということ、そこら辺をちゃんと仕分けして書いた方が分かり易いということですね。

坂井委員　　そういうことです。

阿部座長　　前回、今度の家畜改良増殖目標は、プロだけがみるのではなくて、例えば消費者や食育の関係者など一般の方々も見るということを事務局がおっしゃっていましたから、そこら辺の配慮が必要かなと。そういうことでよろしゅうございますか。

坂井委員　　はい。

阿部座長　　では、そういうことで、よろしく願いいたしたいと思います。

他にいかがでしょうか。

新村委員　　これは課題ということになっているのだと思うのですが、ロース芯の筋肉脂肪含量の件に触れられていて、私は、これの含量が高いのがおいしいことにつながるのかどうか、ちょっと判断できないのですが、第1回目の議事録をみますと、筋肉脂肪が高い方がいいのではないかと、これがおいしさにつながるのではないかとことをおっしゃっているようにとれますので、もしそうであるのであれば、改良方向の中にもそのことが入ってきていいのではないかと。これをやっていかないと輸入豚肉に対抗できなくなってくるのではないかと。要するに、国産の豚肉はおいしい、ということをやたえるようにしていかないと、将来、輸入豚肉に対抗できなくなるのではないかと、思っておりますので、こういうことがこの中に入っているのであれば、あえて申しませんけれども、もし抜けているようであれば、そのことを取り上げていただければなと思いました。

阿部座長　　それは、最初の基本的な方向の中に、そういう考え方を入れるべきだという考え方になりますか。

新村委員　　最初に入れるべきなのか、途中でもよろしいのですけれども、入っていると良いと私は思いました。

阿部座長　　それは、ページでいくと2ページですね。2ページの最後の方に、WTO、FTA交渉等の中で、「消費者の多様なニーズに対応した高品質化等」ということで、概念的には書き込まれているわけですが、先ほどの坂井委員のご意見もあわせて考えますと、7ページでは特徴のあるということ、2ページでは高品質化やニーズにこたえてということ、同じようなことを意図しているのでしょうかけれども、書き方が別々になっているので、そこら辺は少し具体的に書いたらどうかというご意見ですね。

新村委員　　そうですね。

阿部座長　　括弧して書くかどうかは別として、例えばおいしさを求める、ロース芯の脂肪、きめの細かさなどを少し書き込んだらどうかと思います。それが、テーブルミート主体の日本がこ

れからやっていくことだということを入れるべきだというご意見ですね。

新村委員 おいしさにかかわる要因は何であるのか、今、私と言えるわけではないのですが、将来の方向として、何かそういうものがないと、国産豚肉は輸入豚肉に負けるのではないかと、という危惧を私は抱いているわけです。というのは、近年、輸入豚肉の割合がどんどん増えてきて、最近では、国内消費の豚肉の45%は輸入豚肉です。5年ぐらい前に比べると、毎年1%か2%ずつ輸入豚肉が増えてきている。それに対抗するためには、コストでは勝てないと思っていますので、国民の欲しがっているおいしい豚肉は国内でつくられてしかるべきではないか。何がおいしい要素なのか、私にははっきり分かりませんので、それは、入江委員や尾形委員がいらっしゃいますから、お話をさせていただくことにしまして、何かそういうものがあつた方がいいのではないかと私は受け取ったわけです。目標としては、体重を増やすという方が分かり易いのかもしれないのですが、おいしさというものがあつてもいいのではないかと私は思っております。

阿部座長 入江委員、いかがですか。

入江委員 現行目標に比べると、肉質の部分でさまざまな配慮が行われていると思います。例えば筋内脂肪のことも入れていただいておりますし、「おいしさ」という表現もあり、「多様性」という表現もされている。本来的には、もっと詳細に加えた方がいいのかもしれないですが、今回は、特定の形質というのですか、評価法というところで置かれていると私自身は理解しています。この評価法をある程度しっかり確立していったら、同時並行的に肉質の改良をどんどん進めていく。国際競争という面でも、新村委員がおっしゃったように、価格面では競争できないので、品質で競争するために、筋内脂肪も入れられている。

特に筋内脂肪につきましては、前回もいいましたけれども、海外で筋内脂肪を低くし過ぎて味が悪くなった。筋内脂肪が低過ぎると味が悪いというのは事実で、それをどこまで上げていくのかというのは、まだ明確な線がないのですが、海外よりは高くした方が日本人好みになるというのは事実です。その辺をどう加えるのか、少し難しいのですが、加えられればよくなるかもしれません。

山本班長 ロース芯の脂肪含量という具体的な記述につきましては、6ページの「改良増殖をめぐる課題」というところで記述してございます。ただ、改良目標の部分、具体的にいいますと7ページの部分では、ロース芯の脂肪含量という記述まではしておりません。ただ、先ほど入江委員からご説明いただきましたけれども、「基本的考え方」のところを読んでいただきますと、「肉質等の品質の向上に向けた改良を推進するものとする」と。その下のまた書きで、1.としまして、「実効性の高い肉質の改良手法の導入」ということで、先ほど申しましたロース芯の脂肪含量なども含めた中身になってございます。8ページの(2)のと

ころでもう一回、「肉質評価手法の導入等により実効性の高い改良」ということで、ここは、今の段階で、具体的にロース芯の脂肪含量だけに限定するのはどうかといった意見もあったものですから、とりあえずそういう表現にさせていただきますが、ロース芯の脂肪含量も含めまして、もっと実効性の高い育種手法があれば、どんどん改良していった、目に見えるような形でおいしさなども評価していくことは非常に重要だと思っておるところでございます。

先ほどの坂井委員のご指摘の中で、「特長のある豚肉生産」というのは少しはっきりしない部分がある、といったお話があったと思います。先ほどいわれましたように、産肉性と品質は方向がちよっと違うのではないかという部分はあるのですが、国際化の進展や消費者ニーズへの対応といったことで、例えば脂肪含量だけといった単純な形ではなく、複合的に、いずれにしても、消費者ニーズへの対応といったものを踏まえて、特徴のある国産豚肉ということをアピールしていくことが非常に重要ではないか、と思っております。

坂井委員 あえて言わせていただきますと、前回の「基本的考え方」の1.の「今後」以降のパラグラフの方がすっきり落ちるのですね。今回の「基本的考え方」は、先に「特長のある豚肉生産を推進するため」と来るものですから、「うーん、分かりづらいな」と思ったのです。前回は並列的に書かれているのです。課題の受け取り方としては、その方がスムーズに頭の中に入ってくるという気がいたします。

石井委員 「特長のある」というところは、前回の話で、肉質だけに特徴があるということではなくて、例えば繁殖能力が非常に高いといった特徴があるという形だと思っていたのですが、この記述ですと、産肉の豚の肉質だけにとれるのではないかなと思います。もともとは、肉質だけではなくて、例えばデーリーゲインにすごく特徴があるといったことも含めたものだったと思うのですが、どうでしょうか。

山本班長 ここの「基本的考え方」のところでは、「特長のある豚肉生産」ということで、特徴のある豚肉生産をするに当たっては、「また」以下のところで書いていますけれども、特徴のある純粋種を確保する必要があるということになってきますので、この中に、そういった意味が直接入っているわけではないのですが、後段のところ、当然の話として、そういった特徴のある豚というのが出てくるかと思っております。

阿部座長 それでは、これについて整理したいと思います。が、新村委員が先ほど言われたことに関しては、6ページの「改良増殖をめぐる課題」の2.のところ、「肉質の改良を推進するため、ロース芯筋内脂肪含量等」云々と書かれていて、これが課題だということになっていて、それを受けた形で3の「改良増殖目標」ということで、つながっているという理解でよろしゅうございますか。

もう一つは、この「基本的考え方」の整理ですけれども、今までの委員の意見を参考にして書き直すということで、内容についてはお任せいただくということでよろしゅうございますか。

具体的な数値ということになると、9ページ、10ページというところになるのですが、これについてはいかがでしょうか。具体的な増体量、ロースの太さ、背脂肪、出荷日齢と出荷体重との関係、そこについてご意見をいただければと思います。

家入委員 前回もお話したことなので、重複になる部分もあって、遠慮していたところもあるのですけれども、今度の目標案の中で、背脂肪の厚さが現状値より厚くなる方向で目標値がセットされているわけです。背脂肪を厚くすることは、市場のニーズや消費者ニーズなどを考えた上で、適当である、ということでこういう形になっていると思いますが、諸外国をみても、脂肪を厚くすることは、エネルギー効率の損失であり、赤肉生産効率の損失であって、そういった損失を伴うことを改良目標として扱えるのか、非常に疑問に思います。前回、私は、現状維持がいいのではないのでしょうか、と申したと思いますけれども、脂を厚くする、効率を悪くすることを改良の目標に挙げるのは世界で初めてではないかなと思うので、その辺、ご意見を伺えればと思います。

山本班長 ランドレース、大ヨークシャーの厚さのことですね。

家入委員 はい。

山本班長 バークシャーとデュロックにつきましては、現状水準ということで置いておきまして、ランドレースと大ヨークシャーはいろいろ議論があるところだと思うのですが、ここの部分につきましては、ある程度脂肪が欲しいという市場ニーズ、世の中のニーズがあるということであれば、ここの意味するところは、必ずしも増体性を犠牲にして脂肪を厚くするという意味ではなくて、適当な水準は保ちながら改良していくという考えではどうかということで、前回の目標数値を今回の目標数値として当てはめたという話と、一方で、脂肪が余り薄過ぎますと、繁殖性といった面で問題があるというご意見もございまして、とりあえず1.7という数字にしたわけでございますが、ここの部分は、冒頭でも申しましたように、委員の皆様方からいろいろご意見を伺いたいなと思っております。

阿部座長 前回も意見がいろいろ分かれたところなのですが、改めて皆さんから意見をいろいろ聞かせていただいて、ある方向に集約していきたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。

尾形委員 ランドレース、大ヨークシャーは雌系ということを考えますと、薄くなればなるほどいいというものではないと思うのですね。現在アメリカでも、ランドレース、大ヨークシャー

は薄くなり過ぎて、また脂を少し乗せるという動きが見られません。

適度な脂肪はどれくらいかというのは、数字的には何ともいえないのですが、大体この辺が限度ではないか。雄系の品種はある程度薄くなっていったら、まあ、どこまで認めるかは別にしましても、現状維持または、もう少し下がっていてもいいかなという気はするのですが、雌系という位置付けのランドレース、大ヨークシャーについては、繁殖性のある程度重視しなければいけないのではないかと考えています。そのために必要な脂肪はどれくらいかというのを考えたときに、私は、前回の目標値で十分ではないかなとみております。

阿部座長 他にいかがですか。

石井委員 私としましては、どちらかというの家入先生の意見に賛成でして、改良の方向として、どうしても戻るという形になっていますので、それから考えた場合は、現状維持という形の方がいいのではないかと考えています。背脂肪は繁殖性に非常に関係しますので、薄くなり過ぎるのは確かにいけないと思います。ただ、諸外国をみてみますと、ランドレースで 1.2 cm、下手をすると 0.9 cm でも、産子数が非常に多い系統はたくさんありますので、現状ではそこまで気にするほどではないと思っております。ただ、ニーズ等いろいろあると思いますが、これ以上薄くなることは少し問題があるかもしれませんので、そのあたりについて、考慮しなければならないところもあると思います。

ランドレース、大ヨークシャーですから、筋内脂肪について、直接どうこうという話ではないと思いますが、筋内脂肪を考慮して厚くするというのであれば、それは間違った話でありまして、筋内脂肪をプラスにして、背脂肪を薄くすることは十分可能な話ですので、そこは切り離して考えていただきたいと思います。

阿部座長 他にいかがですか。

入江委員 私も同意見でして、筋内脂肪との関係を考えても、特に和牛などはそうなのですが、皮下脂肪を厚くして、サシを入れるという状況にはなっていませんし、それは豚でも、なかなか難しいですが、可能だと思います。目標値とすれば、現状の 1.6 cm、1 ミリ増したとしても肉質などほとんど変わらないと思いますし、増やすのとそのままというのは随分違うところで、現状の 1.6 cm でいいのかなと思います。

阿部座長 他にいかがでしょうか。

坂井委員 前は、ランドレース、大ヨークシャーについて、背脂肪厚をどうするかという議論は余りなかったような気がするのですが、むしろデュロックの背脂肪厚をどうするかということについて、多くの委員の方がご発言なさったのだらうと思うのです。

私の感覚からいいますと、ランドレース、大ヨークシャーについては、0.1cmですので、上げようと下げようと余り関係ないかなという気も半分してはいるのですけれども、目標値をいじる必要はない、という気はします。現在が1.6cmであれば、1.6cmのままでいいのではないかと思います。

一方、デュロックですけれども、デュロックは考え方がやや違っていて、背脂肪厚とロース芯内の筋肉内脂肪は、正の相関があるようではないのではないかと。育種的にいうと、そうなのかもしれませんが、これは新村委員からもご発言いただきたいと思うのですが、一般的に、背脂肪が薄くなり過ぎるとマーケットニーズに合わなくなるという評価が多く出ているものですから、そういう意味では、デュロックについては、今の背脂肪厚1.8cmを変える必要はないのではないかと。これをあえて1.6cm、デュロックにおける0.2cmというのは大きいですから、これを下げる必要はないのではないかと、私は前回申し上げたつもりであります。

阿部座長 他にいかがでしょうか。

鹿又委員 もう既にお話が出ていますけれども、繁殖性の問題、筋肉内の脂肪含量の問題を考える必要はあると思うのですが、どちらかといいますと、私も現状維持でよろしいのではないかと考えます。

新村委員 私のところは、ハム・ソーセージをつくっている企業が会員という立場でございますので、品種別にどうこう言うことでなく、豚肉をハムやソーセージに利用する立場で申し上げますと、今、ハムやベーコンは、脂の多いものはまず売れませんので、いかに脂のない肉を手に入れるかということで四苦八苦している。海外から豚肉をたくさん買いますけれども、それは海外で脂を削った状態で日本へもってきてくれる。ところが、国内の豚肉を加工用の原料に仕向けようとするすると脂を相当削らなければならないので、結果的には歩留まりが悪くて値段が高くなってしまいますので、国産は使いづらくて、輸入のものを使うということで、今、ハム・ソーセージ用に豚肉を年間40万トン強使っていますけれども、8割は輸入の肉で占められているという状態です。

我々、脂の薄いものが欲しいのだということからすると、今後の家畜の改良目標といいますか、豚の目標としても、できれば脂の薄い方向へもっていったいただきたい、と思っております。

阿部座長 ありがとうございます。

皆さんからいろいろ意見をいただきましたけれども、この問題は前回も議論があって、そのときは、市場のニーズというか、特に岡島委員だと思いましたが、今、全体的に脂が薄くなっているというのがあって、格付の問題がある。その他に、石井委員が言われたことで、筋肉内脂肪との相関はあると認められるけれども、今おっしゃったように、筋肉内脂肪を高めながら背脂肪の低いものをつくれるとか、薄いからといって、必ずしも繁殖性が悪いとはいえないとか、家入委員がおっしゃいましたけれども、1.6cmを1.7cmにすることは、脂肪をつけるということで飼料効率

の問題。それは、敷衍して言いますと飼料自給率とのかかわりになってきて、0.1cmといえどもインパクトは大きい。そういうことをトータルに考えると、専門家の意見としては、現状維持で、ランドレース、大ヨークシャーでも1.6cmで良いのではないかというのが大勢の意見だということで整理してよろしゅうございますか。

では、事務局、そういうことで、どうぞよろしく願いいたします。

その他、ご意見等お願いいたします。

坂井委員 9ページの純粋種と10ページの肥育豚の産肉成績といいますが、発育成績の関連ですけれども、今回の文書ですと、1日平均増体量は、純粋種はやや抑え目に、その一方で、肥育豚の能力については、出荷日齢183ということで、前回よりも5日早く目標体重に達するようになっていきます。肥育豚の出荷日齢、目標体重を早目にしようとするならば、純粋種側の増体量を高めなければいけないというのが一般的なことではないかと思うのですけれども、これは、前回の委員会の意見をとらえて、このようにされたのだらうと。どうもそこがしっくりこないと思うのですが、この数値の根拠についてお聞かせいただけますでしょうか。

山本班長 純粋種豚につきましては、直接検定成績のデータを使っているわけですね。それで、数字の水準といたしましては、ステーション検定といったレベルの数字になっています。

肥育豚の能力につきましては、統計情報の生産費調査の数字を使っておりまして、ここの数値の水準は、前回もいろいろ議論があったところなのですが、例えば、純粋種の1日平均増体量が幾らになるから、肥育豚の能力はこれぐらいになるといった直接的にリンクする数字ではないと思うのです。肥育豚の成績、このデータ自体は、純粋種をかけ合わせる中で、雑種強勢の効果といったものが入ってきますし、肥育豚が実際にフィールドで飼われている飼養管理状況とか、最近、成績が伸び悩んでいるといった話もございまして、そこは直接リンクしないのではないかと思います。

いずれにしても、そういった制約があるのは承知の上で、純粋種豚はステーションレベルの数字、肥育豚はフィールド段階の数字を出してきているということでございます。

出荷日齢の部分でございますけれども、ここで使っているデータは、生産費調査のデータですが、正直いいまして、前回説明しましたとおり、出荷日齢もずっと横ばいで推移してきているのですけれども、前回の研究会も含めて、いろいろご意見を伺いますと、実際には、レベル的には、そういった統計数字よりもかなり高くなっているような実態もあるのではないかとということもございましたので、そういった要素もいろいろ織り込んで、今回の数字をつくったということでございます。

阿部座長 よろしゅうございますか。

坂井委員 はい。

阿部座長 他にいかがでしょうか。数値にはこだわりません。11ページ以降、改良手法等についても整理されておりますので、そちらの方も含めまして、いろいろご意見をいただければと思います。

尾形委員 最後の数字はどういう数字を入れられる予定なのか、ちょっとお聞かせ願いたいです。総頭数、何万頭というので、大体の数字はどれくらいになるのでしょうか。

高橋班長 今回の段階では何とも申しようがない、というのが現状でございます。自給率の議論がこれから本審企画部会でも始まり、畜産企画部会でもこれから議論になるところでございます。これは、これからの議論を踏まえて考えるということになると思います。

阿部座長 こちら辺については、養豚問題懇談会でも議論に上がることになるわけですか。担い手の問題とかいろいろなこととも絡んでくるわけですね。

高橋班長 養豚問題懇談会には、その時々状況なども報告することになります。タイミング的にいつかというのは分かりませんが、養豚問題懇談会もあと2回残っておりますので、その辺の状況についてはご報告したいと思います。

阿部座長 よろしゅうございますか。

尾形委員 はい。

阿部座長 他にいかがでしょうか。この研究会は今日が最後ですので、その他のことでも結構です。

坂井委員 先ほどの出荷日齢とも関連があるのですけれども、山本班長のおっしゃるとおりでありまして、純粋種の改良だけでコマーシャルベースの肥育日数が短縮できるという状況にはない。今、コマーシャル段階では、むしろ病気との闘いが非常に大きな問題だろうと思いますし、病気の出荷日齢に及ぼす影響は大変大きいものがあると思います。そういう意味で、11ページの4の「その他」のAに「遺伝的能力を十分発揮できる適切な飼養・衛生管理の徹底により」と書かれている。ここに、まさに山本班長のおっしゃったことが書かれているのだろうと思うのですが、もっと強調すべきではないかなと思います。

先ほどお話がありましたように、前回 188日を、前回の議論に基づき、183日までもってきた。つまり、純粋種の増体量としては、一定の遺伝能力のレベルに来ているのだと。しかしながら、コマーシャル段階では、その能力がまだまだ十分発揮し切れていない。それだけではないかもしれませんが、その要素が強い。となれば、コマーシャル段階で、いかにしてそういう環境を整えて

やるか、あるいは衛生管理を徹底するかということが重要になってくるのだらうと思うのです。前段の方で整理されているように、今後、生産性を高めていくためには、衛生管理という意味ではS P F化が重要な手法ではないかなと思うのですが、そういったことを書き込むことに問題があるのかどうか。この衛生管理という中で、S P F化ということを書き込むことに何か問題があるのか。あるいは、各委員のご意見、今後、このようにしていくべきだというご意見があればお聞かせいただきたいと思います。

阿部座長 ありがとうございます。今日出ておりませんが、吉田委員が、今、坂井委員がおっしゃっていたことを強調しておられましたね。いかがでしょうか。

山本班長 まさにおっしゃるとおりだと思いますが、私どもの認識としては、S P Fは、衛生的な管理を行って、生産性を非常に高めるという意味では非常に有力なツールだと思っておりますけれども、ただ、そういったところ以外でも、衛生的な管理をされて、生産性を上げている方もおられると思いますので、今回の目標の中には、そういった具体的な衛生管理方式や飼養管理方式までは記述せずに、全国的なレベルとして、そういったものも含めて衛生管理のレベルを高めていって、生産性向上に結びつけていただきたいということで書いております。だから、S P Fの話も中に入ってくる。当然の話でございますが、表現としましては、S P Fも含めまして、全体的な衛生管理ということでやっております。

阿部座長 よろしゅうございますか。

坂井委員 全農でもS P F化して7年ぐらいになりますし、ご存じの方もいらっしゃるかと思うのですが、民間団体としてのS P F豚協会の法人化がようやく認められたのですが、そのように民間レベルで、S P F化について取り組んでいるところです。公の機関というと、言い過ぎなのかもしれませんが。行政レベル、国・県のレベル、研究所ではS P F化がやられているのです。研究所ではそれぞれS P F化されて、改良に努められている。

ところが、普及段階でどうなのかというと、コマーシャル段階まで十分に浸透していない、推進できていない。このところを突破していかないと、飛躍的に衛生レベルを上げていくことはできないと思います。

したがって、先ほど申し上げましたように、「衛生管理の徹底」というのは、書かれていることとしては非常によくわかるのですが、では、具体的にどうするのかといった場合、それ以外に策があるのであれば教えていただきたい。我々としては、まず、それを普及していくことによって、国内の養豚の生産性のレベルを上げていくことにつながると思っているところです。

阿部座長 S P F化については、最初の「豚をめぐる情勢」

の中にも、現在、取り組みが行われているというのがありますね。それを踏まえて、最後の「その他」のところの「遺伝的能力を十分発揮できる適切な飼養・衛生管理の徹底」ということになると、班長から最初にお話がありましたように、畜舎環境や、どの養豚農家でもやれることをしっかりやりましょうということですね。そういう理解なのですね。坂井委員のいわれることもよくわかりますけれども、そういう整理でよろしゅうございますか。

坂井委員 わかりました。

阿部座長 そろそろお約束の時間になってまいりましたが、他にいかがでしょうか。よろしゅうございますか。

それでは、修正すべき点が大きいところ、小さいところ、いろいろありましたけれども、それにつきましては、事務局と私、座長に任せていただいて、整理されたものを11月4日の家畜改良増殖小委員会へ報告することにさせていただきたいと思いますが、それでよろしゅうございますか。

(「異議なし」の声あり)

阿部座長 どうもありがとうございました。

それでは、最後に、廣川生産技術室長からごあいさつをお願いしたいと思います。

廣川室長 今日を含めて2回の研究会、大変ありがとうございました。非常に勉強になるというか、貴重なご意見ばかりで、これからもまたいろいろ勉強していきたいと思っております。

今日の話の中では、特に、出荷体重を出すための係数として出荷日齢、雑種強勢の効果をどうみるのか、環境要因として、衛生問題があるのだけれども、それはどうやって見込むのだ、といった議論について、次の改定の際にはきちんとできるようにしたいと思いました。

豚については、家畜の中ではいろいろなデータがあるものなのですが、今日お見せしたぐらいのデータしか出てこないし、科学的な分析ができていなかったと思いました。

今回の研究会だけではなく、これから先、中小家畜班を中心に、委員の皆様にもいろいろお願いすることがあると思います。よろしく願います。

本日は、本当にありがとうございました。

了